

■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

日本燃焼学会設立 50 周年記念に寄せて

第八代会長 河野 通方

日本燃焼学会とのつきあいは、1970 年の第 8 回燃焼シンポジウムで発表して以来で、今日までに至っている。大阪瓦ストレーニングセンターで行われた講演会で火花点火の研究を発表した。当時、若い人を誰も知らず、まして研究室からは 1 人だけの参加であったので、講演の後は阪大歯学部在学中の高校の友人宅に泊まって将来の話などをしてきた記憶がある。本学会の運営に携わったのは木村逸郎先生の後を受けて理事(当時幹事)を拝命してからである。また、福谷先生の後をうけて、平野、新潟両会長のもとで庶務を担当した。両会長の経営能力に比べて随分見劣りのする担当者であったが、国際燃焼学会との関係、連携について御教示いただいた。

その後、新潟先生の後を受けて 1999 年に 8 代目の会長を拝命した。論文集の見直しや法人化等の中期的な問題はあったが、何といても 2002 年の札幌における第 29 回国際燃焼シンポジウムをいかに成功させるかであった。現地実行委員会は伊藤先生が委員長を務めて下さることになっていた。委員長がおやりになりやすい総合的な環境を形作るのが役目であった。そのときも、会長として実行委員会には口出しは一切しないが責任だけは全うすると心に決めたのも今では懐かしい思い出である。また、最大の問題である財政面に関しては、佐藤順一氏、徳本恒徳氏などが国際的な情報を会員諸氏に報告する研究会を学会内に立ち上げて頂き、それを企業から支援して頂くという画期的なアイデアが大いに役にたった。以上のようなことで、幸いにも同シンポジウムは誠に盛会裏に終了した。ここに改めて関係各位に感謝の意を表したい。法人化については、従来の法人の在り方が再検討されつつ有る段階であったので、法人化はいずれすることとして時期尚早とした。現在、NPO 法人に向けて進行中であるのは御承知の通りである。燃焼学会は本来、国際燃焼シンポジウムとの連携を前提として設置されたものである。その母体の国際燃焼学会が科学重視、基礎研究重視の学会であるので本学会もそれを伝統としてきた。それはそれで良いのであるが、法人の公共性という観点からすればそれだけでは不十分な面も出てこよう。特に、燃焼機器関連企業の支援については早急にその方法を考える必要があると思われる。経産省の材料関係の委員会で金属熱処理関係の企業の方々と議論をしたが、そのとき関係企業が中小企業であることが最大の問題であるとわかった。学会は、対象とする学問の成熟度に応じて変化するべきである。また、その対象範囲を変えていく必要もでてくる。このことが法人としての公益性に應えることになるのではないと思う。

さて、1968 年に修士課程に進学した。指導教官は故熊谷清一郎教授(以下熊谷先生)である。「何故、燃焼を専門分野にしたか。」という質問を受けることも有り。また自問自答することもある。当時、内燃機関の排気が問題になりつつあって、内燃機関の泰斗の方が「これからは燃焼が重要となる。」といわれたことも原因の一つであることは事実である。しかし、本当は熊谷先生との出会いがことの起こりではないかと思える。進学後の最初の輪講会に出席したところ、熊谷先生が木村逸郎先生や酒井忠美先生を交えて「鳥目はビタミン A 不足のためだが、それでは鳥にビタミン A を飲ませれば夜も目が見えるようになるのであろうか。」などの話を輪講そっちのけで話されていた。それに大いに心を引かれたのが最初であったと思う。以下に熊谷先生が日頃よく口にされていた言葉を紹介する。

熊谷語録その 1 : 「金があるから研究できない。」これはリーズ大学での国際燃焼シンポジウムでゴールドメダル受賞時のスピーチでも触れられているが、常に言い続けられていた。その後に「ティンカンワックス」の話が続くこともあった。オリジナルな研究は買える装置ではできないということ、装置を工夫して自作すれば考える力が養われるということ、であろうか。

熊谷語録その 2 : 「燃焼とは研究である。」これは、米国の燃焼機器会社の社長に「燃焼とは何ですか。」と聞かれて、そのときの答であるとのことであった。その後、この言葉が社旗の一部に使われたとのことであった。

熊谷語録その 3 : 「エンジンを頭の中で回す。」これは、基礎研究をやっているが、それはエンジンの基礎研究として、すなわち明確な目的をもって研究を行うべしの意味である。これは小生との合作であるような気がしているが定かでない。熊谷先生は中島飛行機に就職されていたこともあったので実機に対する造詣と思い入れは深かった。「君たちの研究は窒素酸化物を減らそうとしているのか、増やそうとしているのかさっぱり分からない。」と続くこともあった。

熊谷語録その 4 : 「頭のいいやつは、またあの話か、と人のいうことを聞かない。だから何回も話してやらないと頭に入らない。」これは、もともと先生の恩師の富塚先生がいつておられたらしいが、この言葉によって熊谷語録を何回も聞かされることとなった。

以上、熊谷語録のほんの一部を紹介させて頂いた。御本人は誰しも認めるように非常にオリジナリティの有る方であったが、その言葉にも誠にオリジナリティがあると思う次第である。御冥福をお祈りします。